

## 「受胎告知」

2015年04月04日

**ルカによる福音書 1章26節～38節。** 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

ルカ福音書の中で、最も美しいシーンではないか。古来、画家たちによって「受胎告知」の聖画が多く描かれている。天使ガブリエルはナザレのおとめマリアに「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と呼びかける。戸惑っていると、天使は、あなたは神から恵みをいただき、男の子を産む、イエスと名付けなさい、この子はいと高き方の子と言われる、彼は永遠にヤコブの家を治めると、主イエスの誕生を告知する。マリアは、男の人を知らないで、そんなことがありえましょうかといぶかる。天使は、あなたに聖霊が降り、聖なる者、神の子を産む、不妊の女と言われたエリサベトも男の子を身ごもっている、神には不可能はないと宣言する。マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と天使の言葉をそのまま我が身に受け入れる。

天使の言葉を率直に受け入れるマリアの謙虚と神への信頼は美しい。ルカは、主イエスのご降誕は人間の自然的な関わりを排除した聖霊の関与する出来事であると伝えている。信仰は現世を超え、永遠に向き合うことから始まるのである。

マリアは神の子イエスの母として美しく描かれてきた。しかし、母マリアは現実的には厳しい生活を強いられている。① 結婚前に出産したので、ナザレの村人の非難を浴びた。② 夫ヨセフとの間に少なくとも7人の子どもを産んでいるが、ヨセフは早くに亡くなり、子沢山の寡婦になっている。③ 長男イエスはナザレを去り、神の国の宣教活動に入るが、民衆に慕われ、枕する所もない多忙な生活をし、時の権力者から体制を壊す者として命を狙われる。④ 最後は、十字架につけられた息子が目の前で苦しむ様をなす術なく見つめている。マリアほど母としての苦悩を舐めた人はいないだろう。ところが、天使は「おめでとう、恵まれた方」と呼びかけている。マリアへの恵みは「主があなたと共におられる」ということである。どんなに辛く、厳しくとも神が共におられることを「恵み」という。ブラジルで辛苦を舐めている女性たちがマリアと自分を重ね合わせ、耐えている姿を見た。彼女たちは神が共にいてくださるという信仰を持って、神の恵みを賛美していた。